

四季折々の森の植物や鳥・虫などの動物を紹介します

1. アジサイ (ユキノシタ科)

梅雨の時期になると曇り空でも、雨の日でも、ひととき鮮やかな花の色合いを見せるアジサイが観察できます。アジサイはユキノシタ科の落葉低木です。今では多くの園芸品種がありますが、もとは日本原産のガクアジサイを改良してつくられたものです。アジサイの花の色は緑白色から水色、青、薄紅と移り変わっていきますが、花びらと見えるのはじつは萼です。園芸用に改良された栽培種では美しい萼に包まれた小さな花にはオシベやメシベもありますが、そのはたらきは不完全で実を結びません。咲き始めは葉緑素が残っていて緑白色の花も、咲きすすむにつれて葉緑素は消え、アントシアンが合成され花の色は水色になります。咲き終わる頃にははしだいに赤みを帯びます。土壌のPHも影響すると言われ、土壌が酸性だと花の色は青色、アルカリ性だとピンク色になります。



2. ハナショウブ (ユキノシタ科)

「ふれあいゾーン」のビオトープ池にはハナショウブが咲いています。ハナショウブはノハナショウブを原種とした園芸品種で、日本で改良されたものが多く、白色、桃色、紫色などの色をした大きな花をつけます。ノハナショウブ、ハナショウブ、カキツバタ、アヤメ、キショウブは剣のような大きい葉が根元からはかま状に重なって生えるアヤメ科の植物です。どれも葉や花の外見がよく似ているので見分けがつけにくいのですが、キショウブ、ノハナショウブ、ハナショウブは花茎のなかがつまっていて、葉の中央部が盛りあがってよく目立ちます。花の色はキショウブが黄色、ノハナショウブは赤紫、ハナショウブは品種によってちがいます。一方、カキツバタ、アヤメは花茎が中空になっていて、葉の中央脈は目立ちません。花の色は青紫色または白色ですが、カキツバタが水辺、湿地に生育するのに対してアヤメは草原、畑地に生育します。なお、キショウブは外来種です。

5月5日の端午の節句に茎や葉を菖蒲湯にするショウブはアヤメ科の植物と姿がよく似ていますがまったく別のサトイモ科の植物です。5月から7月にかけて花柄が伸びて、その先に淡い黄緑色の小花がたくさん集まったソーセージ状の花をつけます。



ハナショウブ



キショウブ

3. クリ（ブナ科）の花が咲いています

「里の森ゾーン」の水路より南側の森にクリの木があって、花が咲いています。ドングリ（ブナ科）の花については「森の生きものガイド」（6月1日第7号）でも述べましたが、クリの花について説明します。

栗の花は1つの花の中にオシベとメシベがあるのではなく、雄花は葉のつけ根に上向きについて尾のように垂れ下がります。全体にクリーム色を帯びた白で、個々の花は小さいのですが穂状に集まって特有のむせかえるような、生臭いような香りを放ちます。

この強い香りに誘われて非常によく昆虫が集まり受粉を助けます。

雌花は3個の子房を持っていて、雄花のつけ根につきます。やがて受精した子房が肥大して果実（クリの実）となります。9月から10月にかけて実が成熟すると自然に鋭いイガのついた皮（殻斗）が裂けて中から堅い果実（クリの実）が1～3個現れます。



雄花

雌花



4. カルガモ（カモ科）

水路近くを歩いていると、カルガモをよく見かけます。写真は橋の欄干に止まっているカルガモのつがいです。カルガモは日本ではほぼ全国的に繁殖していて留鳥のものが多くいます。

嘴の先端が黄色で他は黒く、足は赤みを帯びた橙色で他のカモと区別ができます。また、身近な場所で繁殖するカモはカルガモだけです。よく親ガモが子ガモをつれて歩く姿がかわいいで新聞やテレビで報道されます。イネ、イヌビエなどの種子や昆虫、タニシ、シジミなどの貝類を食べます。



5. カイツブリ（カイツブリ科）

カイツブリは別名を鴛（にお）と呼ばれます。琵琶湖は昔「におのうみ」と呼ばれていました。それだけ琵琶湖に多くのカイツブリがすんでいたことを示しています。カイツブリは昭和40年（1965年）5月に「県の鳥」に選ばれました。最近では、琵琶湖のほか市街地の公園に池などでもよく見かけます。

びわこ地球市民の森の水路でもときどき見かけますが、餌をとりにきているのでしょ。大きさはムクドリぐらいの大きさで魚類やエビ、カニ、水生昆虫などのエサをとるためによく潜水します。

よく似た鳥にカンムリカイツブリがいます。この鳥は主に冬に琵琶湖にやってきますが、名前のとおり頭に小さいカンムリをかぶっているのと、カイツブリより大きく首が白くて長いので見分けがつきます。

